

「復活する」

2014年12月12日

マルコによる福音書 16章1節～8節。安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った。そして、週の初めの日の朝ごく早く、日が出るとすぐ墓に行った。彼女たちは、「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるのでしょうか」と話し合っていた。ところが、目を上げて見ると、石は既にわきへ転がしてあった。石は非常に大きかったのである。墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座っているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた。若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおりに、そこでお目にかかれる』と。」婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。

主イエスが埋葬されて三日目の朝早く、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは主イエスの遺体に香油を塗り直すために、日の出とともに墓に向かった。墓の前には、彼女たちの力では動かせない大きな石があることを知っている。それでも、彼女たちは、主イエスへの篤い思いに突き動かされ、墓に急いだ。女性は思いを即座に行動に移す。墓に着き目をあげて見ると、石は脇へ転がされていた。墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座っていた。白い衣は天使を差し、右手は祝福の方角を差す。彼女たちは非常に驚いた。若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおりに、そこでお目にかかれる』と。」彼女たちは震え上がって墓を出た。正気を失い、誰にも言えないほどの驚愕であった。

主イエスの復活がキリスト教信仰の核である。復活に関する最初の証言をパウロは、紀元55年頃書いたコリントの信徒への手紙 一15章に力強く論述している。パウロは「実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました」と書き、「最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました」と復活の主イエスに出会ったと証言している。更に「キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です」と述べ、復活の確かさを訴えている。死人の復活などあり得ない、復活したと言うのなら、その体はどういう体なのかという疑問が出されたのは当然であろう。それに対し、パウロは「自然の命の体」ではなく「霊の体」とであると、肉の目で体験できることではなく、霊の、信仰の目で受け止められると言っている。

70年頃に書かれたマルコ福音書は復活した主イエスを記していない。天使は「あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおりに、そこでお目にかかれる」と告げている。ガリラヤとは、弟子たちが主イエスの愛と真実を体験した喜びの場である。愛が息づくガリラヤで復活の主イエスと出会うことができる。私たちも互いに愛し合う生活の場で、主イエスの復活の命に与ることができる。そして、その命に与った者に永遠の神に結びついた生を約束してくださる。